

古絵図・出典
「徳川家康公在城當時の駿府絵巻」



駿府城下町再発見

戦国乱世を平定した家康公は、豊かな国造りの手本とするため、ここ静岡市に慶長12年（1607）画期的な城と城下町を江戸時代最初に完成させました。大御所時代、駿府に家康公を訪問した外国人も、自分たちの住むヨーロッパの都市よりも清潔で規模も大きいことに驚いたことが記録されています。

さあ！みなさん、日本で最初に完成した美しい駿府城下町についてみてみましょう。

四百年前の徳川家康公時代の駿府城と駿府城下町



駿府城天守閣と御殿内部

駿府城本丸（**図中①**）には、大御所徳川家康公が、幕府の大江頭（中井大和守正清）に建築させた豪華絢爛な駿府城天守閣がありました。

この絵は、駿府城に天守閣が現存していた当時を忠実に、幕府御用絵師（狩野探幽）が描き今に伝わる貴重な記録です。

御殿内部は、美しい障壁画で飾られていたことがこの絵からも伝わってきます。

駿府城天守閣 重要文化財 東照社縁起絵巻「日光東照宮藏」

藤堂高虎邸宅



（**図中②**）は、徳川家康公家臣の中でも、身分の高い家来が住居を与えられた場所です。皆さんが立っているこの場所は、有名な藤堂高虎の住居があった場所です。駿府城と城下町の建設は、当時の最先端の技術者たちによって、見事な町として江戸時代最初に誕生しました。

その中の一人が藤堂高虎です。高虎が具体的にどの様に駿府城築城に力を発揮したかはよくわかりませんが、築城の名人であった高虎は、宇和島城・今治城・福山城・津城・伊賀上野城・藤所城なども築城した城造りの天才です。関ヶ原の戦いから家康公に従い、大坂城の造営や江戸城の改修などでも実力を発揮していました。名古屋城を築城した加藤清正と対比される城造りの名人です。

大久保長安



（**図中③**）の場所に住んでいた大久保長安は、甲斐国の武田信玄の家臣でしたが、武田家没落後に家康に見込まれ金山探掘などに大いに実力を発揮します。関ヶ原の戦いが終わると、豊臣支配下の佐渡金山・生野・石見銀山（島根県大田市大森町）などの全てが徳川幕府の手に渡ると、これらの金山や銀山を統括する総奉行となります。各地で産出された金銀の多くは、この駿府に運ばれ「駿府ゴールドラッシュ」の時代が起こっていました。

ところが長安は、晩年に全国鉱山からの金銀を着服した罪から家康の寵愛を失い、職を罷免されていく中、69歳になった慶長18年（1613年）4月25日に駿府で死去しました。長安の死後、生前に不正審問をした理由で、家族は全員処刑され、縁戚関係にあった諸大名も連座処分や改易などの憂き目にあっています。

イラスト 河野修治

さらに家康は、埋葬された長安の遺体を掘り起こして、安倍川の川原で斬首して首にしめています。しかし事件の真相は明らかでなく、幕府内における権力闘争を回った本多正信・正純父子の陰謀とも言われ、これが世にいう「大久保長安事件」です。しかし長安は、交通網の整備や一里塚の建設など一切を任せられ、東海道五十三次の整備などに重要な功績を残しており、

駿府で造られた「駿河小判」と「銀貨」

（**図中④**）の上魚町（金・金座町）では、後藤庄三郎光次がこの地で「駿河小判」を鋳造しました。駿河小判は武蔵小判と並んで、日本最初の小判です。一方、両替町二丁目には、銀座が設置され「銀貨」が造られていました。

駿府に置かれていた金座（**図中④**）や銀座（**図中⑤**）は、慶長17年（1612）に江戸に移転しました。このため東京の銀座は、駿府の銀座が移転して出来た町です。そのため江戸の街は、駿府に関係する町名が他にも沢山残っています。これらの街は、駿府の町造りが元となり「駿府型町割」（都市計画）が江戸に広まった名残です。これについては、次の「駿府城下町」でご紹介します。



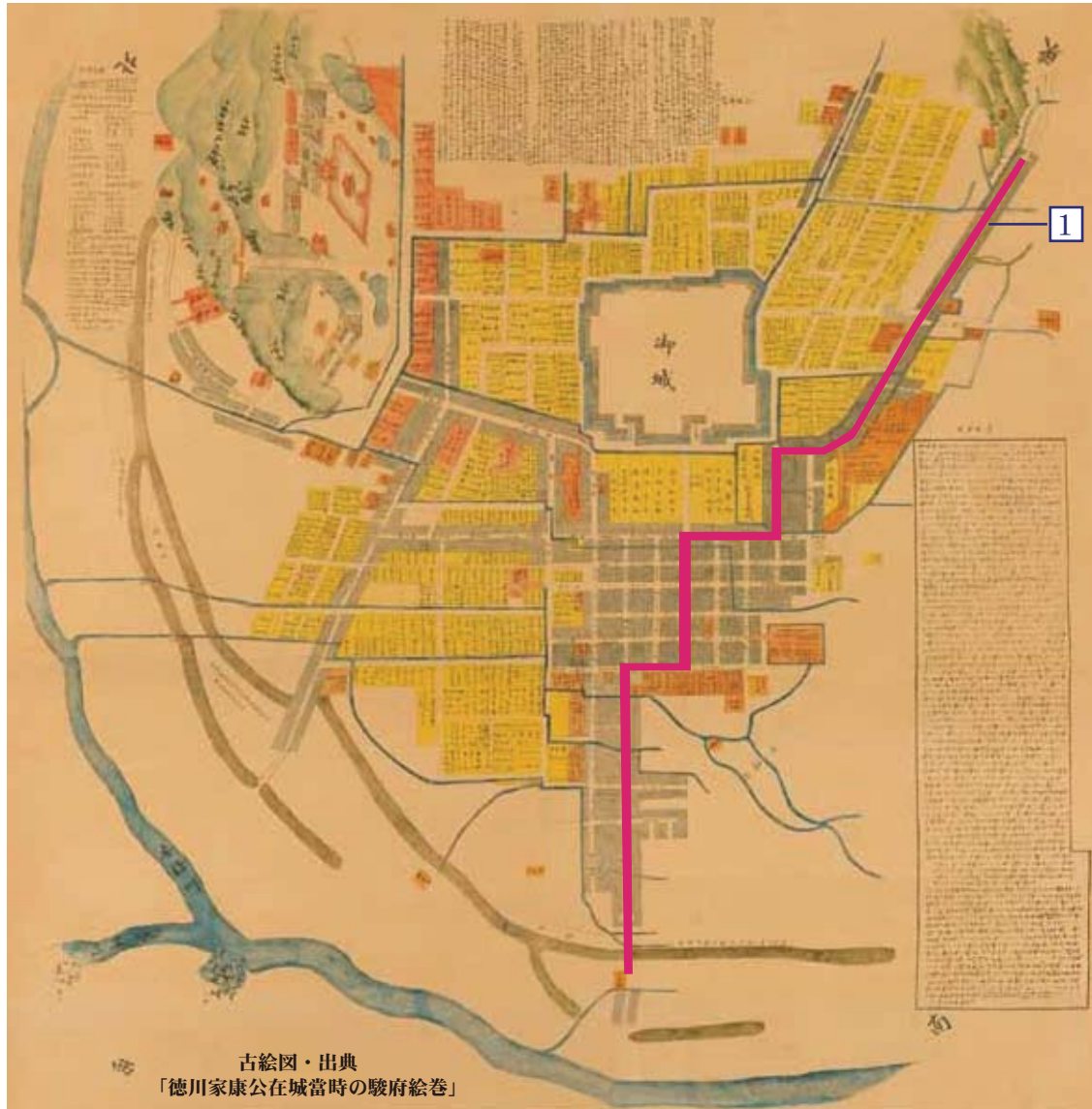
駿河小判の図 出典「駿河誌」四巻図録所収

文責 黒澤 裕（郷土歴史研究者）
参考文献 「図録博物館 徳川家康と駿府大御所時代（静岡市刊行）」 黒澤 裕 編者

現在地（静岡市葵区追手町7-1 コモテビル）は、家康公在城時は築城の名人の誉高い藤堂高虎邸宅跡です。古絵図掲載の大きなドアは大手門を、壁面は石垣を、階と階の仕切りの紋様は石垣に囲られた家紋などをイメージしたものです。日本の礎がいっぱいある駿府城下町再発見のお役に立てれば幸いです。コモテ = comote = communication ootemati = 情報発信地 追手町 という意味の造語です。

【駿府城下町再発見】

企画：駒見広
共催：静岡中央新聞販売部
後援：徳川家康公顕彰四百年記念事業推進委員会
駿府古絵図提供：慶長元年創業 丸子宿 丁子屋
12代目 柴山 信夫 様
制作：徳川崎宣社
イラスト：河野 修治 様
監修：郷土歴史研究者 黒澤 裕 様



古絵図・出典
「徳川家康公在城當時の駿府絵巻」

駿府城下町再発見 ② 徳川家康公により生まれ変わった駿府城下町の誕生

徳川家康公は、慶長10年(1605)将軍職を引退すると、駿府(今の静岡市)を大御所の地と定め江戸から駿府に移りました。その頃の駿府は、(写真①)のように安倍川の流れば今と大きく違って、静岡市中心街を写真の様に流れていました。そこで家康公は、新しい駿府城と駿府城下町を建設するため、外様大名に命じて薩摩土手(写真②)を築いて危険を防ぎ、安倍川の流れを現在の様に改修して駿府の街は生まれ変わりました。(写真③)は、現在の静岡市区と駿河区を上空から見たものです。安倍川の流路が変わったその変化を比較してみてください。

昔の安倍川の流れを、現在の様に変えた徳川家康公



① 古き安倍川の流れ
(黒澤 箒) 作図



② 生まれ変わった江戸時代の駿府
(静岡新聞社所蔵)



③ 現在の静岡市
(静岡市役所所蔵)

■風水の思想によって造られた駿府城下町
家康公は古代中国の思想(風水)による都市造りの考え方を参考に、全く新しい江戸時代最初のモデルとして駿府城下町を完成させました。それは(図④)のような考え方によるもので、駿府城を中心に風水の思想を取り入れました。図を見て確かめて下さい。



図④ 駿府城下町の風水

- ①東には、青竜の神が宿る「巴川」
- ②南には、朱雀の神が宿る「安倍川」
- ③西には、白虎の神が宿る「東海道」
- ④北には、玄武の神が宿る「電瓜山と富士山」

駿府城下町はこれにより、①良い風が取り入れられ、②豊かな水に恵まれ、人と作物に役立つ、③邪魔な物体が一切入って来ないこと、④電瓜山と富士山を町のパワーの源となる考えから造られたのです。

■江戸時代最初に完成した駿府城下町は天下人徳川家康公の町

駿府城下町は、徳川家康公が晩年大御所政治を行った重要な拠点でした。このため駿府は江戸や名古屋よりも早く街が完成し、日本の首都として注目され発展し賑わった城下町でした。

駿府城下町の特徴

①「土農工商制度」が確立し、城下には武士・商工業者・商家・僧侶が居住し、農民の中には住んでいません(戦国時代は混在していた)。

②駿府城下町は、通称「駿府96ヶ町」と呼ばれ96の町から成り立っていました。

③大御所徳川家康公のお願のため、日本の政治・経済・文化の中心でした。このため次のような活動が行われていました。

- ・駿府は日本の首都と考えられていました。
- ・全国通貨として、駿府で金貨(小判)・銀貨が造られていました。
- ・家康公を支えた多くの著客入が、駿府城下に住んでいました。
- ・家康公は、貿易に力を入れていたため商業が非常に発展していました。
- ・全国の大名家たちが、大御所詣りとして駿府にたまため江戸よりも賑わっていました。
- ・家康公は外交や軍事も掌握していたため、ヨーロッパ諸国から多くの外国人が来ていました。

④全国で一番美しい町として、次の様な工夫がされていました。

- ・安倍川の水を町中に供給し、美しい水路が設けられ、ところどころに水車がありました。
- ・曇り日や風の強い日には、町中の水路を閉鎖して自動的に道路に散水しました。
- ・水路の水は、火災時に火事場に集中的に送水するシステムができていました。これは駿府前奉行所の「水道方掛同心」の仕事でした。
- ・駿府の町や駿府城は、安倍川の伏流水が豊富なため井戸から美味しい水を飲んでいました。
- ・町中で騒音や火、あるいは汚米(粗米)を出す職人たちは、街外れに住んでいました。
- ・東海道は街中を跨ぐ手(直角に曲がる)として敵をくまらず様に出来、また街中を走る東海道からは、駿府城天守閣の見事な景観が角度を変えて見せ場を作っていました。(左、古絵図参照)――
- ・駿府にきたイギリス人やスペイン人たちは、美しい駿府の町のことを記録に残しています。



駿府城下町模式図
若尾俊平氏作図



現在の静岡市上空からの写真
「図録、博物館 徳川家康と駿府大御所時代」静岡市刊行 所集
文責 黒澤 箒(郷土歴史研究家)

現在地(静岡市区追手町7-1 コモテビル)は、家康公在城時は築城の名人の誉高い華堂高虎邸宅跡です。古絵図掲載の大きなドアは大手門を、壁面は石垣を、階と階の仕切りの模様は石垣に据られた家紋などをイメージしたものです。日本の礎がいろいろある駿府城下町再発見のお役に立てれば幸いです。
コモテ = comote = communication ootemati = 情報発信地 追手町 という意味の造語です。

【駿府城下町再発見】

企画：駒見広

共催：静岡中央新聞販売部

後援：徳川家康公顕彰四百年記念事業推進委員会

駿府古絵図提供：慶長元年創業 丸子宿 丁子屋

12代目 柴山 信夫 様

制作：徳川崎宣社

監修：郷土歴史研究家 黒澤 箒 様